

高三啓輔

『字幕の名工 秘田余四郎とフランス映画』

白水社 2011, 240 p.

ISBN978-4-560-08125-9

評者 北代美和子



柳父章・水野的・長沼美香子編『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』(2010年、法政大学出版局)は、明治期以降の主要な「翻訳」論を集めた貴重な資料集であり、開国直後から戦時中にかけての日本の翻訳思想史を原典でたどれるように構成されている。その収録論文の一編に太平洋戦争直前の1939年、太田龍男が雑誌『日本映画』に発表した小論「スーパー・イムポーズにおける日本語の貧困」がある。太田龍男は洋画の配給業務に携わっていた人物で、翻訳字幕の制作者ではない。したがって字幕で洋画を楽しむ観客、あるいは洋画の観客動員を目指すビジネスマンとしての立場から、自分の理想とする翻訳字幕の姿を述べていると考えてよいだろう。太田は「現に行はれてゐるスーパー・イムポーズの多くは(...)それが日本語であるべきことよりも、翻訳上に取りおとしがたいといふことの方に、過大の注意がむけられてゐるのではないでせうか」と嘆き、スーパー・イムポーズ(字幕)を「唯一の媒体として、(...)外国映画を日本の大衆の心の内へ、しみとほらせてゆかなければならぬのです」と主張する。太田が望んだような「映画をみる大衆の魂に直接的によびかけることができ(...)したがって、その映画自体が、おもしろく楽しい映画として、よろこび迎へられ得ることになる」字幕を制作したのが、1936年から67年まで生涯で600本以上の字幕を手がけたと言われる字幕翻訳者、秘田余四郎だった。本書はその秘田の生涯を、実際の翻訳事例をまじえて記述した伝記である。

秘田余四郎は明治41年(1908年)、徳島県に生まれた。幼少時に一家で東京牛込に移住。8歳で母をなくしたこともあり、父親への反発からか、学業優秀でありながら不良がかったところのある青年に育つ。一高受験に失敗、浪人生活を2年続け、1927年に東京外語学校(東京外国語大学の前身)フランス語科に入学。1931年に卒業するが、世界恐慌後の不景気で深刻な就職難のなか、しばらく無頼の暮らしを送る。1936年に欧州映画の輸入・配給を主業務としていた商社、東和商事に就職。創設者の川喜多長政社長の夫人で、副社長でもあった川喜多かしの強い推挙を受けてフランス映画『罪と罰』の字幕を担当。字幕翻訳者としての

スタートを切った。秘田 28 歳のことである。『罪と罰』は 1936 年の『キネマ旬報』ベスト・テン 6 位入りを果たした。その後、『女だけの都』、『我等の仲間』(1937)、「キネ旬」ベスト・テン第 1 位を獲得したジュリアン・デュヴィヴィエの『望郷』(1939)など、戦前のフランス名画の字幕を担当。また短期間ではあったが、大衆小説も書き、『解決(おとしまへ)』(1939)は舞台化されるほどの成功をおさめた。太平洋戦争中は、軍属の通訳として仏領インドシナに赴任。さらに上海の国策映画会社「中華電影」代表に担ぎ出された川喜多のもとで働いたりしたあと、敗戦で帰国。鎌倉に居を構え、上海で知り合った高見順ら、いわゆる鎌倉文士と交流を続けながら、秘田自身の言葉によれば「十五ヶ国語、二十一ヶ国の映画の日本語版を手がけた」。その一方で、テレビ時代の到来とともに字幕の限界を強く意識し、早くも 1950 年代半ばから、日本語吹き替えの制作会社を創立したりもしている。しかし、1967 年、胃ガンのため 58 歳で世を去った。

映画の字幕には、観客が 1 秒間に読める文字数を考慮して、「1 秒 4 文字」という原則がある。本書の著者が言うように「ほとんどの字幕翻訳が『不実なる美女』に近い」(p. 9)かどうかは別として、翻訳字幕の制作には通常の「翻訳」とは異なる技法が求められるのは事実である。著者は秘田の字幕を「まさに[不実なる]美女たちの乱舞だったと行ってさしつかえない」と評しているが、秘田の翻訳手法が、上記太田論文の解題で長沼が紹介しているシュライアーマハーの「読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす」だったことは間違いない。たとえば『赤と黒』(1954 年)の主人公ジュリアン・ソレルのせりふ。

Je suis petit, Madame, mais je suis loin d'être bas.

わたしはつまらぬ人間です、奥さま。しかし卑しいまねはいたしません。(桑原武夫・生島遼一訳)

これを秘田は「一寸の虫にも五分の魂です」とした。

あるいは『第三の男』のなかで闇屋のボベスコが言うせりふ、「今夜の酒は荒れそうだ」。原文は **I shouldn't drink it. It makes me acid.** である。ボベスコは「そいつは悪酔いしそうで飲めねえなあ」と言っているわけで、秘田訳にはかなりの飛躍がある。domestication も極まれりというところだが、まさに太田が言う「大衆の魂に直接的によびかける」字幕ではあった。

また秘田は英米仏のみならず、「十五ヶ国語」の翻訳を手がけたそうだが、ロシア語など守備範囲外の言語の場合はもちろん下訳があり、それをもとにして字幕を制作した。この点でも「まづ翻訳する人(...)それを日本語として洗練する人」がいるべきだという太田の理想を実現したと言える。

ところで秘田の字幕がどの程度の「美女の乱舞」であったかについては多少の疑問が残る。映画の字幕そのものが保存されることは少なかったために、秘田が実際にどのような仕事をしたのか、その全貌を検証するのは残念ながら不可能のようだ。だが、本書に一部が収録されている『天井桟敷の人々』の字幕を見ると、要点をみごとに押さえてダイジェストした訳であり、日本語としての語感のよさは抜群だが、意味内容は原文とそうかけ離れていないようにも思われ

る。秘田訳と『キネマ旬報』所収の訳との比較もされているが、「キネ旬」訳より秘田訳のほうがむしろ忠実な例もある(たとえば *ne jouons pas sur les mots*。 *jouer sur les mots* は「言葉を意図的にとりちがえる、あいまいな言葉を使う」という意味の慣用句。「キネ旬」訳は「言葉だけで演じて貰いたくないものだね」、秘田訳は「ダジャレはやめろ」)。

いずれにしても、秘田の字幕は豊富な語彙と優れた日本語感覚を駆使して、ところどころに印象的な名ぜりふをはさみながら、日本語の語調を生かしたリズムカルな文体で読みやすさを生み出し、それによって字幕が観客の心にストレートにはいりこむことを可能にした。太田論文を批判した *Abé Mark Nornes* に言わせれば、まさに「字幕という暴力的な仲介者の存在を目立たなくする翻訳スタイル」(『日本の翻訳論』 p.301)ということになる。しかし、映画産業は営利事業である。客がはいらなければ成立はしない。そして秘田訳とはなによりもまず、ひとりでも多くの観客を映画館に呼ぶことに成功した翻訳だったのである。

.....

【著者紹介】

北代美和子 (KITADAI Miwako) 翻訳家。日本文藝家協会会員。上智大学大学院外国語学研究所修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『アンダルシアの肩かけ』など。

.....

